分断された二つの国

ドミニカ共和国とハイチ

村井友子

はじめに

1996年5月16日，ドミニカ共和国(以下，ドミニカと略称)では大統領選挙が実施された。これは94年の大統領選挙で大規模な不正が発覚したため，通常4年の大統領の任期を待たずに実施されたものである。94年大統領選で不正がなければ当選していたと言われているのが，今回の選挙で45.8%の得票率で，1位となったドミニカ革命党(PRD)候補ペニャ・ゴメスである。この黒人の大統領候補は，ハイチ人の血をひくという理由から，94年の大統領選同様，今回の選挙でもさまざまな中傷を浴びなければならなかった。それは「ペニャ・ゴメスは本当はハイチ人なのに出生をごまかしている」，「彼はドミニカとハイチを統合しようとしている」等というもので，中傷の背後には，強い反ハイチ主義が存在している。

また今回の選挙戦のキャンペーン中に数百とも数千ともいわれるハイチ人が国外追放に処され，祖国に戻ることを余儀なくされた。ちなみにドミニカ国内には，およそ50万人のハイチ人が住んでいるといわれ，その多くが不法滞在者である。

ドミニカにおいて根深い問題である「ハイチ問題」の本質とはいったい何なのだろうか。また，小さな島を互いに分けあいながら，なぜドミニカとハイチは隔絶してしまったのだろうか。本稿では，両国の歴史を主にドミニカ側からの視点で辿りながら，この問題について考えてみたい。

1　植民地支配と分断の歴史

コロンブスによって「エスパニョーラ島」と命名されたこの島(スペイン人上陸以前は「キスケージャ」〔大地の母〕と呼ばれていた)には，タイーノ・アラワク族，シグアヨ・アラワク族等の先住民族が住んでいた。彼らはキャッサバの栽培を中心とした焼畑農業を営み，独自の宗教(一種のアニミズム)・文化を持っていた。1492年のコロンブスの「新大陸発見」以降，スペイン人による虐殺，鉱山での強制労働，疫病等により，先住民族の数は日に日に減少し，やがて彼らの姿はこの島から消えてしまう。労働力にこと欠いたスペイン人は先住民族の代わりにアフリカ人を奴隷として連れてきた。

ドミニカ国境の町ダハボンの検門所近くに集まるハイチ人
(1988年7月10日，筆者撮影)

スペインによるこの島の植民地支配は先住民族文化の滅亡から始った。

「コロンブスがもっとも愛した土地」，これは観光立国であるドミニカの観光客誘致のうたい文句のひとつである。1992年，いわゆる500年記念祭に向けて，ドミニカのバラゲール政権は総工費約2500万ドルをつぎ込んで「コロンブス灯台」を建設した。十字架を地に横たえた形の巨大な石造りモニュメント（縦210メートル，横40メートル，高さ30メートル）の中にはコロンブスの遺灰が納められ，建設のコンセプトは「カトリックの伝道と文明の進化の礎を築いたコロンブスを賛美」し，新たな観光スポットのひとつとすることにあった。

しかし実のところ，この島で，スペインによる植民地支配の「黄金期」は長く続かず，16世紀に入って，鉱山が枯渇しはじめ金の採掘が見込めなくなると彼らの関心はメキシコやペルーに移っていった。カリブへのスペインの勢力が弱まった頃，フランスやイギリスの海賊や私掠船*1がカリブに出没し始め，やがて，彼らの一部，特にフランス人がこの島の西岸に住みつくようになる。フランスとこの島の覇権を巡って争いを続けていたスペインが，1697年，リスウィック条約により，フランスにエスパニョーラ島の西側3分の1を譲渡。スペインのこの島における勢力の衰退が明白になる。この時，ドミニカとハイチの分断の歴史が始まった。

現在のドミニカとハイチを比較すると，ドミニカの方がずっと豊かだが，18世紀当時は完全に逆であった。フランスはスペインから譲渡された西側サンドマング（フランス領時代のハイチの名称）に広大な砂糖黍プランテーションを築き，そこに大量のアフリカ人奴隷を労働力として投入した。西側の奴隷制砂糖黍プランテーションは飛躍的な発展をとげ，18世紀後半には世界最大の砂糖生産地として繁栄するに至った。一方，東側スペイン領

ドミニカとハイチの比較

	ドミニカ共和国	ハイチ共和国
人口 (万人)	709[1]	690[2]
面積[3] (km²)	48,734	27,797
1人当り GDP[4] (USドル)	960*	208*
言語	スペイン語	フランス語，クレオール語
非識字率[5] (1990年，%)	16.7	47.0
主要輸出品目[3]	フェロニッケル，砂糖，コーヒー，ココア	軽工業品（繊維製品等），コーヒー
人種構成[6] (%)	混血〔白人・黒人〕(72.9) スペイン系白人(16.1) アフリカ系黒人(10.9) その他(0.1)	アフリカ系黒人(90) 混血(10)

(注) ＊1994年（1990年価格）。
(出所) 1）1993年センサス。2）1993年 IMF 推定。3）*Country Profile : Domonican Republic Haiti, Puerto Rico, 1995-96,* E. I. U. 4）*Boletín estadístico de la OEA*, Vol.12, No.1-2, Jan.-Dec. 1994. 5）*Statistical Abstract of Latin America*, UCLA, 1995. 6）外務省編『中南米諸国便覧』1992年度版。

は，サンドマングへの牛肉等の供給地として，西側に依存した経済を細々と営んでいた。

1791年8月，サンドマングでフランス革命に触発された黒人奴隷のリーダー，トゥサン・ルベルテュール率いる奴隷軍が蜂起し，12年にわたる長い闘争が始まる。この反乱は，東側スペイン領の人々にとって予期せぬ不意の出来事であったようだ。奴隷軍とフランス，そしてその背後でサンドマング支配を狙うイギリスによる争いと駆引きの狭間で東側スペイン領の人々は翻弄されてゆく。東側スペイン領は数度にわたって奴隷軍やフランス軍の侵略を受け，1795年にはフランス・スペイン戦争後に締結されたバーゼル条約（1795年）によってスペインが島の東側をフランスに譲渡したため，東側スペイン領の人々はフランスに統治されることになった。

1804年，フランス領サンドマングはフランスからの独立を果たし，元奴隷たちによる独立国家ハイチが誕生した。トゥサンの後継者デサリーヌが第一代皇帝に就任し，新憲法によってフランス人が所有していた全財産を没収した。このいわゆるハイチ革命によってフランスが築き上げた砂糖黍プランテーションは崩壊した。それは東側の人々にとって，それまで依存してきた市場を失うことを意味し，彼らがうけた経済的打撃ははかりしれないほど大きかった。その後，東側でサンチェス・ラミレスらスペイン系植民者が決起し，旧スペイン領部分の支配を続けていたフランス軍を破り，1814年，再び東側はスペイン領に戻った。

1819年，南アメリカでシモン・ボリーバルがコロンビア共和国設立を宣言し，1821年4月，スペインとの決戦に勝利する。これに触発されたエスパニョーラ島の副総督ニューネェス・デ・カセレスは同年12月にスペインからの独立を宣言し，グラン・コロンビアへの連合を求めたが，ボリーバルはこの要請を受け入れなかった。時のハイチの大統領ジャン・ピエール・ボワイエはカセレスの構想支持を表明し，全島掌握にむけて懐柔政策を展開した。1822年ボアイエはサントドミンゴの無血占領を果たし政権につくと彼は，旧スペイン領の人々が不利益を被る政策を次々と実施していった。現在のドミニカとハイチの敵対的な関係は，この

ボアイエによる22年間の全島支配時代(1822〜44年)に形成されたと言われている。

徐々に旧スペイン領でボワイエの圧制に対する不満が高まってゆくなか，1938年ファン・パブロ・ドゥワルテ，ラモン・メジャ，フランシスコ・デル・ロサリオが率いるスペイン系植民者グループが独立のための秘密結社トリニタリアを結成し，密かな独立運動が始まった。1844年，独立を果たした旧スペイン領，スパニッシュ・ハイチこそが現在のドミニカ共和国なのだ。

このようにドミニカとハイチという二つの国の発祥は，植民地時代のヨーロッパ列強の覇権争いに起因しており，東側スペイン領は，列強間の紛争の狭間におかれ，また，度重なるハイチ人の侵攻で何度も存亡の危機に瀕してきたのだ。

＊1　しりゃくせん。国王から与えられた私掠特許状によって，敵国の艦船を襲撃し，拿捕する権利を認められた民間の船舶。

2　トルヒージョとハイチ

ドミニカに国家としてのアイデンティティと，ナショナリズムが形成されたのは，今世紀のトルヒージョ政権時代(1930〜61年)からだと言われている。ハイチから独立を果たしたドミニカは，その後もう一度スペインに統治を依頼するほど脆弱な主権しか持ち得ておらず，20世紀に入ってからも，米国に占領される(1916〜24年)など，混迷をきわめていた。

米軍の退却後，強力な軍事力と政治力，そしてカリスマ性の下に，独裁政権を築いたのがトルヒージョ将軍である。トルヒージョは彼をとりまくブレーンたちとともにドミニカの新たなアイデンティティを掲げ，振興してゆく。それは「スペイン的なものの賛美，白人至上主義，カトリック教」という価値観に裏づけられたナショナリズムであり，この価値観がトルヒージョのブレーンのひとりであったホァキン・バラゲールの現政権にも受け継がれていることは，先のコロンブス灯台の建設の事例を見ても明らかである。

黒人と白人の混血ムラートが大多数を占めるドミニカにおいて，アフリカ人の血を否定し，旧スペイン領としての文化のみを強調する価値観は歪んでいると言わざるをえない。この価値観によると，アフリカ系が大多数を占め，スペイン語でなくクレオール語を話し，ブードゥー教を信仰するハイチ人は未開の黒人であり，非文化的な国民である。

植民地時代，奴隷貿易によって大量のアフリカ人が連れてこられた西側フランス領では，白人に比べアフリカ人の比率が非常に高く，また奴隷制による階層型社会であったため，あまり混血化が進まなかった。一方，東側スペイン領では，連れてこられたアフリカ人奴隷の数が西側と比べて少なく，また農牧業を営むスペイン人植民者とそこで働く奴隷の間の階層的分離が緩かったため，早くから混血化が進んだ。以上が現在のドミニカとハイチの人種構成の相違の背景と考えられる。確かに現在の両国の文化を比較すると、ドミニカの文化にスペイン的要素とアフリカ的要素の混在が感じられるのに対し、ハイチの文化は明らかにそれとは異質なアフリカ色の濃いものと感じられる。しかし筆者にはその違いがトルヒージョ等が言うほど明確なものではないと思えるのである。トルヒージョが振興したアイデンティティは，古くからこの国のスペイン系支配層が持っていたものであり，トルヒージョはそれを国家の統合化政策の求心力として利用したのではないだろうか。

20世紀に入り，ドミニカとハイチは米軍の占領下に置かれた(ハイチの米軍占領は1915〜36年)。そ

の間，土地資源が豊富なドミニカには米国資本による広大な砂糖黍プランテーションが築かれたが，人口過密で小農民が多いハイチにはプランテーションは広がらなかった。30年代初頭，ハイチより大量の出稼ぎ労働者がドミニカの米国系砂糖黍プランテーションめがけて流入してくる。その当時，世界大恐慌で砂糖の価格が暴落し，それまでハイチ人砂糖黍労働者の主要受け入れ国であったキューバが政策的にハイチ人を締め出した。ドミニカの米国籍砂糖黍プランテーションは安いハイチ人労働力を使ってかろうじて持ちこたえていたため，余剰労働力がドミニカに流入していったのだ。

1937年10月，トルヒージョ大統領はドミニカ国内に居住するハイチ人の大虐殺をひきおこした。この時少なくとも1万2000人ものハイチ人が殺され，その中には女性や子供も含まれていた。助かったのは米国系の砂糖黍プランテーションで働いていた労働者で，多くのハイチ人がハイチに逃げ帰っていったという。

当時トルヒージョはこの大虐殺はあたかも国境地帯で起きた偶発的な事件であるかのような発言をしているが，実は大量のハイチ人の流入によるドミニカ，とりわけ国境地帯のハイチ化を厭んでいたという。しかし，元来国境地帯には植民地時代より西側のプランテーションから逃げてきたシマロン（黒人逃亡奴隷）の多くが住み着いてきた。つまりこの地帯には血統的にみて，ドミニカ人とも，ハイチ人とも，どちらとも言い難い人々が数多く住んでいたのである。ちなみに先述の政治家ペニャ・ゴメスの両親は国境地帯に住む黒人のドミニカ人で，大虐殺の際，当時まだ子供だったペニャ・ゴメスを置いてハイチ側に逃げなければならなかったという。また，大虐殺があった当時，国境地帯の人々の中にはハイチ人と姻戚関係を結んでいるものも多く，ハイチとの経済交流も盛んで，ハイチ人の行商人と恒常的な取引があったようだ。このような環境の中で国境地帯の人々が反ハイチ的感情を強く持っていたとは考えにくい。虐殺を断行したトルヒージョをはじめとする首都の白人系支配者層と国境地帯等の地方に住む人々の間ではハイチ人に対する意識にかなり差があったのではないだろうか。トルヒージョは独裁政治の中でハイチ人だけでなく自らの政治的立場と相容れないドミニカ人も徹底的に弾圧していった。

以上のようにあからさまな反ハイチ主義政策をとる一方で，大虐殺から5年後の1941年，トルヒージョ政権はハイチ政府と恒常的なハイチ人砂糖黍労働者の供給契約を結び，この二国間契約は86年にデュバリエ政権が倒れるまで続いた。

3　ドミニカのハイチ人

どうしてドミニカ人は砂糖黍収穫労働をしたがらないのだろうか。これは日本人である筆者の素朴な疑問だ。1990年代後半の今なお，ドミニカの砂糖黍収穫労働者の多くはハイチ人である。砂糖黍の収穫期には大量の労働者が必要となり，わざわざハイチから連れて来る一方，ドミニカの農村部の貧困は深刻で，多くの失業者，半失業者を抱え，それが慢性的な農村部から都市，そして国外への人口流出の要因となっている。それでも一般的に言ってドミニカ人は砂糖黍労働者になりたがらない。

この疑問を解くにはやはり歴史を振り返る必要があるだろう。植民地時代，主に砂糖黍を生産していたのは旧スペイン領すなわちドミニカ側ではなく，フランス領すなわちハイチ側だった。アフリカ人奴隷の供給地であったサンドマングでは，アフリカ人奴隷による砂糖黍生産体制が確立しており，フランスの砂糖貿易は奴隷制の上に成り立

っていた。東側スペイン領の黒人はスペイン人が初期の時代に先住民族の代替労働力として連れてきた人々が主体で，彼らは主に家畜の飼育や他の農業労働に従事していた。ドミニカで砂糖産業が本格化したのは第一次世界大戦でビートによる砂糖の生産体制が崩壊したヨーロッパに向けて砂糖の輸出を目論んだ米国が同国を占領し，大規模な砂糖黍プランテーションを作った後のことで，その主要な労働者はドミニカ人ではなく，ハイチ人出稼ぎ労働者だった。ドミニカ人の多くが砂糖黍収穫労働に抵抗感を持つのは，歴史の中で，砂糖黍収穫労働はハイチ人の仕事であるというイメージが形成されたせいかもしれない。

奴隷制崩壊後もなおハイチ人が砂糖黍収穫労働者として国外に出稼ぎに行ったのは，ハイチが貧しく，雇用機会が少ない上に人口過密だったからであり，その状況は今も変わっていない。砂糖黍収穫は重労働で低賃金，供与される住環境も劣悪だが，出稼ぎに来るハイチ人の多くは極貧状態にあり，ドミニカに季節労働に来る以外に術がない人々なのだ。一方，相対的に豊かなドミニカでは，貧農であっても，サントドミンゴや国外に出稼ぎに行くという選択肢が残されている。

二代約30年続いたデュバリエ政権（フランソワ・デュバリエ：1957〜71年，ジャン・クロード・デュバリエ：71〜86年）崩壊後，砂糖黍労働者供給の公式ルートが断たれた両国にブスコーネス(buscones)と呼ばれる人買いブローカーが暗躍し始める。ブスコーネス(通常はハイチ人)は，砂糖黍労働者として募ったハイチ人を連れて国境を越える。ハイチ人労働者をヒマニーなどの国境の町で待ち受けるドミニカ軍兵士たちは彼らを逮捕した後，ドミニカ砂糖公社(CEA：Consejo Estatal del Azúcar)に連行し，労働者として働かせる一方，ブスコーネスたちは労働者1人当りおよそ25ドルのマージンを兵士たちから受け取る。ハイチ人労働者たちはバテジェス(bateyes)と呼ばれる劣悪な居住区に住まわされ，低賃金の上，長時間の労働を強いられる*2。これは明らかな人権侵害であり，ドミニカ政府はしばしば米国の人権団体等から告発されてきたが，その現状は今も改善されていない。

砂糖黍労働に従事しているハイチ人は推定で7万5000人。一方，ドミニカに住むハイチ人は推定約50万で，多くのハイチ人が砂糖黍労働以外に，建設労働者や，行商人，砂糖黍以外の農業労働者等，さまざまな形でドミニカ社会に根をおろしており，その多くが不法滞在者である。またドミニカには数多くのハイチ系ドミニカ人が存在するが，法的にドミニカ人と認定されているのはそのうちの約25%に過ぎないという報告がある*3。

もしドミニカの憲法が定めるとおり，ドミニカ国内で誕生したハイチ人の子供すべてをドミニカ人と法的に認定し，成人した彼らがドミニカ人として選挙権を持った場合，彼らの政治的発言力は脅威となるだろうという指摘がある。このような事情もあり，ペニャ・ゴメスは対立陣営から中傷を浴びなければならなかった。ペニャ・ゴメスの中傷のひとつである「ハイチとの統合」は，ハイチに占領された歴史を持つドミニカの政治の中で常に「脅威」として語られてきた。しかし，現代において，ドミニカとハイチが統合する話は現実的とはいえず，筆者にはそれが親ハイチ政策をとる政治家を封じ込めるための詭弁に聞こえてならない。

その一方で，バラゲール政権はアリスティード復帰前の経済制裁下のハイチに石油を密輸して儲けており，これはドミニカとハイチの間に政治的癒着が存在していることを物語っている。

＊2　*Americas Watch* の1989年の報告による。
Ferguson, James, *Dominican Republic : Beyond*

the Lighthouse, London, Latin America Bureau, 1992, pp.86-87に抜粋が引用されている。

＊3　Corte, Andre and Isis Duarte, "Five Hundred Thousand Haitians in the Dominican Republic," *Latin American Perspectives*, Vol.22, No.3, Summer 1995, pp.94-110.

おわりに

このようにドミニカにおいて「ハイチ問題」はとてもセンシティブな問題である。そのうえ，両国の歴史的関係，政治的癒着と経済的利害等が複雑にからまってその関係は歪んだものとなっている。また，両国が対等な外交関係を築くには，ハイチの社会状況があまりにも不安定で，経済基盤が脆弱である。

また個人差はあるものの，ドミニカ人の意識の中でハイチは，貧しく，衛生状態が劣悪で，教育水準が低く，人口過密で異教徒の国といったネガティブなイメージが強く，根強い差別感が存在する。

両国の間にできた溝は深くそれを埋めてゆくのは容易ではない。しかし両国の関係を改善するためには，まずそれぞれの政治がかわらなければならないだろう。その意味でまず，今年6月30日に行なわれるドミニカの大統領選挙の決戦投票後の政局のゆくえを見守りたいと思う。

そしてまた，ドミニカ人，ハイチ人が両国の歴史的関係を再認識し，自分自身のドミニカ人像，ハイチ人像，そして両者の関係のあり方を考えてゆくことも重要ではないだろうか[*4]。

＊4　1994年の憲法改正により，ドミニカでは今回の大統領選挙より，一位候補が過半数を獲れなかった場合，一位候補と二位候補の決戦投票が行なわれることになった。これに基づき，一位のペニャ・ゴメスと二位のドミニカ解放党（ＰＬＤ）候補レオネル・フェルナンデスの決戦投票が実施されることになった。

〔参考文献〕

(1) 石塚道子『カリブ海世界』世界思想社　1991年。

(2) E・ウィリアムズ著（川北稔訳）『コロンブスからカストロまでII——カリブ海域史，1492—1969』（岩波現代選書）岩波書店　1978年。

(3) Andre Corte and Isis Duarte, "Five hundred thousand haitians in the Dominican Republic," *Latin American Perspectives*, Vol.22, No.3, Summer 1995, pp.94-110.

(4) Emelio Betances, *State and society in the Dominican Republic*, Boulder, Westview Press, 1995.

(5) Frank Moya Pons, *Historia colonial de Santo Domingo*, Santo Domingo, Universidad Católica Madre y Maestra, 1977.

(6) James Ferguson, *Dominican Republic : Beyond the Lighthouse*, London, Latin America Bureau, 1992.

(7) Lauren Derby, "Haitians, magic, and money : Raza and Society in the Haitian-Dominican Borderlands, 1900-1937," *Comparative Studies in Society and History*, Vol.36, No.3, July 1994, pp.488-526.

(8) Meindert Fennema ; Troetje Loewenthal, *Construcción de raza y nación en la Republica Dominicana* (Colección historia y sociedad no.77), Santo Domingo, Editora Universitaria-UASD, 1987.

（むらい・ともこ／図書資料部）